

第5回 小千谷市立小中学校の在り方検討委員会 会議録

日 時：令和7年6月27日（金） 午前9：30～12：00

場 所：小千谷中学校 多目的室

出席者：14人

遠藤英和委員	船岡芳英委員	鈴木進五委員	菊地亜弥子委員	森田雅弘委員
大西洋子委員	渡邊類委員	大場亜梨沙委員	森本恵理子委員	渡邊久美子委員
木原宏幸委員	関麻紀委員	佐藤正敏委員	和田慶太委員	

事務局：5人

小林管理指導主事 久保管理指導主事 小田原学校教育係長 岩渕教育総務係長 和田主任

会議概要：

1. 開会

14人の委員からの出席をもって、「小千谷市立小中学校の在り方検討委員会設置要綱」第6条に基づき、会議の成立を報告。

2. 学校視察

小千谷中学校 佐藤教頭より小千谷中学校を案内いただき、子どもたちの様子等を視察。

3. 委員長挨拶

4. 議事

1. 第4回検討委員会の振り返り
2. 小千谷中学校について（森田校長より標準規模校での教育等について説明）
3. 小千谷市における適正な学校規模について
4. 今後のスケジュールについて

5. その他

6. 閉会

発 言 者	内 容
遠藤委員長	・適正規模についての意見をいただきたい。
船岡委員	・中学校は1学年に3学級、専科教員を配置できる規模が理想。
鈴木委員	・適正規模を検討していくにあたって、予算が限られていることも頭に入れておく必要がある。
大西委員	・子ども同士や子どもと教員間での人間関係がよければ、学校の規模はあまり関係ないのではないか。
渡邊類委員	・人間関係が固定化しすぎることはよくない。
	・ある程度の人数がいて、クラス替えができる1学年に3～4学級程度が望ましいのではないか。
大場委員	・小規模校から標準・大規模校に進学すると、人間関係がうまくいかないケースが多いと聞く。リセットできるという意味で、クラス替えができる環境が望ましい。
	・子どもたちが様々な選択肢を持てるような環境にするべき。
森本委員	・教育環境・指導体制・学校運営の視点から考えると、1学年につき小学校は3学級、中学校は4学級程度の規模が、子どもと学校にとって良い環境。
渡邊久美子委員	・ある程度の人数がいた方が良いことを考えると、将来的には中学校を1校にせざるを得ないのではないか。
和田委員	・小千谷小・中学校以外の近隣校に児童生徒を分散させることも視野に入れて検討するべき。
佐藤正敏委員	・令和19年度には市内の中学生の生徒数見込み(418人)が、現在の小千谷中学校の生徒数(414人)と同程度の人数になることを考えると、将来的には中学校が1校となるのではないかと。
	・通学距離についても考えていかないといけない。情報共有として、片貝町から小千谷中学校までは約6kmだった。
関麻紀委員	・中学校については1学年に3学級が望ましい。
	・規模が大きくなると埋もれてしまう子どもも出てくるのではないかと。
木原委員	・東山小学校のように子どもが1人しかいない学年があるような過小規模校出身の子どもが中学校へ進学した際に、他の小学校で人間関係ができている中に飛び込むというのは、プレッシャーが大きいのではないかと。
	・学校の統廃合は今後避けては通れない。早めに対応した方が子どもたちのためにもよい。

木原委員	・統廃合だけではなく、学区の見直しや小中一貫校等、複合的に進めていくことが望ましい。
菊地委員	・市内のどこに住んでいても同水準の教育を受けられるようにするという視点を持つべき。実際に給食費や修学旅行費等の1人あたりの負担は学校によって差が生じている。
森田委員	・専科教員の配置により学びを深められることや、クラス替えができることで子どもたちにとってチャンスがたくさんあるということは保証していきたい。
遠藤委員長	・周りから見て小千谷市の学校に通いたいと思えるような学校を作ることができるかが大切。 ・小千谷市の将来を長いスパンで見て、検討していくことが必要。 ・学びの質を保証し、よりよい教育を追及していくべき。 ・中学校は専科教員を配置できることを基盤として、小学校以上に喫緊の対応が必要。 (第6回小千谷市立小中学校の在り方検討委員会について) ・第6回検討委員会は、7月17日(木)9:30より、南中学校にて開催することを確認。

上記委員会の次第を記載し、その相違ないことを証明するため、ここに署名する。

令和7年7月17日

小千谷市立小中学校の在り方検討委員会

委員長